本興寺だより

令和二年
五月
第二〇九号

「仏の平等の説は一味の雨の如し　衆生の性質に随って受ける所は同じではない。ちょうど草や木が各々の分にしたがって違った潤いを受けていくのと同じである」

（法華経　薬艸諭品第五）

さわやかな五月の空に青葉の輝きがひときわ美しく映える時です。仕事や行楽に、あちこちで賑わいを見せる例年と違い、新型コロナウイルスの感染拡大防止で緊急事態が宣言された今年は個人も社会も自粛で大変な影響を受けています。

仕事に行く、友だちと懇親をするなど、自由に行動し、気ままに振る舞えた何気ない日常の生活が、実は当たり前のことではなかった有難い事だったのだと気付きます。志村けんさんや岡江久美子さんなども、まさか感染に気付いて一～二週間位で自分が亡くなるとは思わなかったでしょう。信じ難い災難も死も突然やってきます。病気や死も他人事ではないことに気付かされます。

不幸な事を受けない予防と受けた時の心の捉え方が大事だと云われます。

中国の漢時代の古典にある「淮南子＝えなんじ」に［人間万事塞翁（さいおう）が馬］という諺があります。昔、中国の北方の塞（とりで）近くに住む老人（塞翁）の馬が、国境を越えて隣の胡の地方に逃げ、人々が残念がると老人は「そのうち幸せが来るかもしれない」と言った。やがてその馬は駿馬を連れて戻ってきた。今度は人々がそれを喜ぶと老人は「これが不幸の元になるかも知れない」と言った。その内この駿馬に乗っていた老人の息子が落馬して足を骨折した。人々が見舞うと老人は「これが幸福の基になるかも知れない」と言った。その後胡軍が攻め込んできて戦争になり、若者がほとんど戦死したが、骨折した老人の息子は兵役を免れた為無事に生き残った。という故事です。

世の中で起こることは「塞翁が馬」のようなものです。幸せだと思っていたことが不幸の原因になったり、災いの種だと思っていたことが幸運を呼び込むことも多々あるのです。幸せに慢心にならず、不幸の時に落ち込まないことが大切なのです。

仏様は冒頭の文のように、人々が本当の幸せを得るために説かれる教えは天から降る雨のように皆に平等に降り注いでいるのだと説かれています。ただ私達の方が自分の考えや信念に固執して、関心のある部分しか受け入れず差別や区別を作り、真の幸福に至る広い視野と智慧が授からないのだと云われます。

自然界の全ての生き物は、降る雨を体全体で受け留めます。草木も動物も雨に濡れることを拒みません。人間だけが水の尊さを知りながらも、直接濡れることを避けるのに傘をさします。

ご神仏の教えだけは傘をさして遮らずに素直にその雨に心を洗うことが必要なのです。

ある水の研究家によると、雨の九割の水は蒸発や、地中に染み込み、川の水となるのは一割だと云われます。雨は川に入る間も川を流れる間もいろいろな養分を吸って海に至る時には賢い水になっているということです。水も修行をしているのだと。

全ての川の流れが海に注がれ一つの水になるように、神仏のあらゆる教え（キリスト教、イスラム教、仏教の各宗派、神道など）は、法華経という大海の教えに融合されてくるのだと説かれています。この中には大自然の法則・英知・調和して生きる術と、どんな時でも乗り切れる無限の智慧と力が含まれているのです。

雪やあられの試練の雨でも草木の根を育てる恵みの雨なのです。

人生は、何度も想定外の出来事に遭遇します。それが好まざる（幸でない）時でも動揺して心を見失うことなく、全て自分に与えられた試練として受け止めて前向きに進めるかどうかで、不幸から幸への大転換の芽が育つということです。

人生の波風にも倒れず、大きく揺れず、しっかりと進むには草木がそうであるように、小さい樹より大きな樹にならなければなりません。大きくなるほど根が張ってきます。それだけ雨（水）が沢山必要なのです。

神仏の教えを間断なく己の心に雨の如くに注いで自分の智慧を磨き、運命を開いて幸せを掴みなさいと云われます。

コロナで大変なこの時期、社会も家庭も大変な影響をうけています。困難な時ほど外に眼が向き、社会や他人のせいにすることは容易くなります。政治家やコメンテーターは批判に明け暮れています。

日蓮聖人は、「眉は近けれども見えず、自分のとがを悟らず」と云われています。人間は他人のことはよく見えるが自分のことは全く見えていない面があります。己の眉も顔も鏡でしか見えないように。

こういう時であるからこそ自身の考え方、生活習慣などを見つめ直して、逆境を変えていく方法や智慧を見い出しなさいと云われます。自分の心の中に眠っているすごい力は、神仏の教えを学ぶ中で心が洗われ、気付けるのだと云われます。

浮き沈みは誰でも何度もあります。自分に訪れる「塞翁が馬」が最後に幸せをもたらす生き方を心がけたいものです。合掌　　本興寺住職　中　谷　聰　秀